

令和8年度 山梨県総合教育会議 会議録

開催日時 令和8年9月29日（火） 13:15～14:30
開催場所 山梨県防災新館 401会議室
出席委員 知事 長崎幸太郎
教育長 荻野智夫
教育委員 橋本幸子、梶浦陽、小澤幸子、加藤暁子
事務局 植村武彦総合県民支援局長、
花輪幾夫まなび支援課長 ほかまなび支援課員1名、
佐々木邦彦教育次長、高見澤圭一教育監、小池孝二教育監
岩出修司次長、矢崎孝副参事、前島宏文企画調整主幹、
渡辺智人総務課総括課長補佐、石原武人教育企画室長、
一瀬清福利給与課長、長島久美学校施設課長、
望月俊孝義務教育課長、数野浩司高校教育課長、
田中一弘特別支援教育・児童生徒支援課長、高山尚己社会教育課長、
山本晃司保健体育課長、岡部伸二全国高校総体推進室長

次第

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 議事
 - (1)「ネクストハイスクール構想」を踏まえた将来ビジョンについて
 - (2) その他
- 4 閉会

■長崎知事挨拶

大変ご多忙のところお集まりいただき誠にありがとうございます。

この総合教育会議は、私と教育委員の先生方とで本県教育の目指すべき姿を共有し、一体となって改革を進めていく場であります。今日は、「ネクストハイスクール構想を踏まえた将来ビジョンについて」をテーマにご意見を賜りたいと思います。

今年の2月ですが、国で「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）」が策定され、2040年を見据えたネクストハイスクール構想が示されました。山梨県では、この構想に基づく国の改革促進事業につきまして、甲府工業、農林高校、甲府第一高校、都留高校の4校を改革拠点校として提案し、採択されたところであり、高校教育の改革を進める大きな契機になっております。

一方で、国の事業は3年間の期限付きであって、この取組を拠点校だけの一過性のものに終わらせてはならないと考えています。住む地域や通う学校の規模にかかわらず、全ての生徒が自らの可能性を最大限に発揮できるよう、拠点校の成果を県内全ての高校の生徒に届けていくにはどうすれば良いか、ここがポイントです。

後ほど、事務局からの説明を受けて、私からその道筋について提案をさせていただきます

たいと思いますので、是非それぞれのお立場からご意見を賜りたいと思いますのでよろしく願いいたします。

■荻野教育長挨拶

本日はお忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また長崎知事におかれましては、日頃より教育行政に深い関心をお寄せいただき、少人数教育或いは不登校対策など教育施策を強力にバックアップいただいていることに改めまして感謝を申し上げます。

さて本日の総合教育会議のテーマは、「ネクストハイスクール構想を踏まえた将来ビジョンについて」であります。先ほど知事の紹介にもありましたとおり、国の高校教育改革促進事業において、本県では5月の初回の申請で拠点4校全てが採択をいただき、既に学校や関係部局、産業界等を交えたワーキンググループを開催するなど、いち早く将来を見据えた取組を始めているところです。

本県では、小学校の25人学級の制度が完成、また中学校における少人数教育の検討も進捗をみており、義務教育全般に係る県独自の教育施策が整いつつあるところです。今回の構想は、教育施策の中で大切に育ててきた子どもたちを迎える県立高校においても、時代の要請に併せ教育改革を進めていく好機と捉えています。

今年度中には、県としての高校改革に係る実行計画を策定することとなっております。今後の高校教育の在り方について、少子化或いはデジタル技術の進展など社会の変化も見据えながら考えていくことが重要であると考えております。

本日は、ネクストハイスクール構想への取組状況も踏まえながら、本県の高校教育改革をどのように進めていくべきか、その方向性について知事並びに教育委員の皆様それぞれのお立場からご意見を賜り、今後の計画策定に生かして参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

■長崎知事

それでは、早速議事に入りたいと思います。まず議題1の「ネクストハイスクール構想を踏まえた将来ビジョンについて」につきまして、まずはネクストハイスクール構想の採択状況及び取組状況について、事務局から説明をお願いします。

■数野高校教育課長

それでは事務局から、ネクストハイスクール構想の本県の採択状況と取組状況について、配付資料に基づき説明させていただきます。

まず、資料1を御覧ください。国は令和7年度補正予算において「高等学校教育改革促進基金」を創設し、「高校教育改革グランドデザイン2040」に基づく先導的な高校教育改革を推進しています。この事業は、産業構造の変化や人口減少などの課題に対応するため、改革先導拠点を整備し、その成果を域内全体へ普及・展開するものです。この取組の中で重要なのは生徒一人ひとりの興味・関心や能力に応じた質の高い学びを実現して、全ての生徒が自らの可能性を最大限に発揮できるよう多様な学習機会の確保を

図ることとしております。本県におきましては、産業界や大学、関係部局等と連携しながら事業提案を行った結果、4つの改革先導拠点が採択され、総額約62億円の事業採択を受けたところです。

続いて資料1の2枚目をご覧ください。資料の上段には、本県の教育・社会課題の構造分析を示してあります。本県は果樹農業や製造業などの基幹産業に加え、ロボット、半導体、水素関連などの成長産業を有していますが、人口減少や産業構造の変化が進む中、これらの産業を支える人材の育成と確保が重要な課題となっております。こうした状況を踏まえ、資料中央に記載のとおり、本県では人材育成に関する課題を5つに整理しております。左側の①・②では、産業を支える人材の量の確保や、高度な技術・技能の継承に関する課題です。中央の③は、高度理数系人材の育成に関する課題です。右側の④・⑤は、地域による教育機会の格差や、多様な学習ニーズへの対応に関する課題です。そして資料中央下段に記載のとおり、これらの課題を解決するため、4つの改革先導拠点を整備し、その成果を県内全体に普及・展開することで、持続的に発展する教育システムへの転換を図ることとしております。

それでは、資料1の3枚目をご覧ください。各改革先導拠点の取組状況についてご説明します。まず、類型1の「アドバンスト・エッセンシャルワーカー等育成支援」として、甲府工業高校と農林高校です。甲府工業高校では、ロボット、半導体、水素、スマートコンストラクションの4分野を中心に、本県の基幹・成長産業を支える人材育成の拠点形成を進めています。現在、企業や専門機関との協議を進めながら、最先端テクノロジー棟の整備や新たな教育プログラムの具体化に取り組んでいるところです。また農林高校では、スマート農林業やワイン、それらの関連産業など本県の特色を生かした教育モデルの構築を進め、高度営農・営林人材の育成に取り組んでいます。今後は大学や関係機関と連携しながら、環境制御型ハウスや研究・開発・交流機能の整備に向けた検討を進めていきます。

次に類型2の「理数系人材育成支援」としては甲府第一高校になります。甲府第一高校では、新たに整備する研究施設「Y-SPARK」を核として、AIやデータサイエンスを活用した探究活動の充実や、大学・企業等と連携した高度理数系人材の育成の取組を進めていきます。今後は、大学や研究機関との連携体制の構築を進めるとともに、段階的な探究学習プログラムや施設整備の具体化に取り組んでいきます。さらに類型3の「多様な学習ニーズに対応した教育機会の確保」として都留高校になります。都留高校では、遠隔配信設備を整備し、地理的条件にかかわらず質の高い学びを提供するとともに、全日制・定時制・通信制の3課程を活用した多様な学びのモデル構築を進めていきます。今後は遠隔授業の配信体制や学習支援体制の検討を進めるとともに、多様な生徒の学びを支える教育課程の具体化に取り組んでいきます。

また本事業の特徴は改革先導拠点の成果を県内全体へ普及・展開するという点にあります。各拠点で開発する教育モデルやカリキュラムを共有するとともに、教員の循環的な配置、産官学のネットワークの活用、遠隔教育システムの展開などを通じて、本県高校教育全体の質の向上につなげていくこととしています。現在は大学や企業などと連携して人材育成連携会議やワーキンググループにおいて検討を進めるとともに、国が示

した「高校教育改革グランドデザイン2040」を踏まえて、地域の実情等を勘案しながら、県としての高校教育改革実行計画の策定に向けた準備を進めているところです。また各改革先導拠点においては、施設整備や新たな教育プログラムの具体化を進めるとともに、大学や産業界、市町村等との連携体制の構築を進めており、拠点校で創出する成果を県内全体へ普及・展開するための準備を着実に進めているところです。

以上、4つの改革先導拠点を核としたネクストハイスクール構想の採択状況、それから取組状況についてご説明いたしました。

■長崎知事

ありがとうございました。ただいまの説明についてのご質問等はございますか。

(特になし)

今日はこれから重要課題ですが、こうした取組の先にある高校の将来像、高校システムというのでしょうか、それについて提案させていただきたいと思いますので資料2をご参照いただきながら話を聞いていただきたいと思います。

今、事務局から説明がありましたように、国のネクストハイスクール構想に基づきまして、山梨県では産業人材の育成、文理融合、多様な学びの三つの分野につきまして、4つの拠点校でこれからの時代に求められる高校教育の姿を先行的に実践していくことにしています。

構想の話に入る前に改めて本県の教育の目指すところを確認し、共有させていただきたいと思います。二つあると考えています。頑張った人がきちんと報われるようにすることが一つ目です。もう一つは、家庭の事情や住む地域にかかわらず、全ての生徒が自らの可能性を最大限に発揮できるようにすることです。教育は産業に必要な人手を供給する仕組みとは捉えていません。しかしながら一人ひとりの可能性が発揮されれば、その結果として地域産業や社会・生活基盤の担い手が育ち地域も強くなります。この順序を逆にしてはいけないと考えております。その中で高校は、生徒が自らの可能性を見つけ、自らの価値を高める方法を身につける場と位置づけたいと思います。

こうしたことに照らせば、拠点校の取組を個々の学校だけの改革にとどめてはならないと導き出されます。先ほども申し上げましたが国の事業は3年間の期限付きであります。拠点校で得られる成果やノウハウを県全体の財産とし、県内全ての公立高校の生徒に届けてこそ意味があると考えます。特に少子化が進んでいますので、小規模校におきましては開講できる科目や選べる進路が限られてきています。その一方で生徒一人ひとりの学びに対するニーズというものはますます多様化をしております。

そこで私が目指したいのは、山梨全体を一つの学びのキャンパスにするという高校教育の実現であります。そのために本日「山梨まなびのネットワーク構想」を提案したいと思います。この構想の本質は、学びのメニューを学校の側ではなく、生徒の側に立って組み直すことにあります。例えば申し上げますと、これまでの高校教育はいわば、学校が決めた定食を食べる方式であったと思います。しかしこの新しい構想は、生徒の本籍はそれぞれの所属高校におきながら遠隔授業或いは学校間連携による単位認定を活用し、それぞれの学校が強みを持ち寄ることで生徒一人ひとりが、自らの人生設計や関心

に応じて学びを選び、組み合わせることができるようにすること、いわばビュッフェ方式、これに転換していこうではないかという考えであります。

例えば、最先端のデータ農業に取り組みたいという農林高校の生徒が、甲府第一高校でデータサイエンスを学び、甲府工業高校でデータ農業を支える設備技術を学んでいく。こうした学び方を、学校の規模や地理的な条件に左右されることなく小規模校や県境地域の高校生にも開放していきたいと思います。この進め方としましては、まず拠点校と協力校でモデル的に実施し、遠隔授業のノウハウや成果を共有しながら段階的に広げ、県内全ての公立高校でネットワークを活用できる体制を築いて参ります。あわせてこれを支える各学校の教育環境の改善も進めて参ります。

このネットワークの価値は、それぞれの学校が持ち寄る強みによって決まります。今後、各県立高校がそれぞれの魅力を磨き、強化していく取組を県としてしっかりと支援して参りたいと考えております。とりわけ、身延高校、上野原高校、北杜高校など県境地域の高校においては、このネットワークを活用しながら地域との連携による取組を展開し、高校の魅力価値向上と地域活性化の好循環を生み出して参ります。

各高校の生徒が自分の将来設計、思い、将来のビジョンに基づいて本籍をそれぞれの高校に置きながらも、各県立学校で必要な授業を自分で選んで取って組み合わせをしていく、こういう学びの体系です。そういう意味では選択肢が多くなければいけないので、今回はこの4校がまず先行しますけれども、基本的には各学校それぞれが特徴をしっかりと磨いていただいて、県立学校に所属する生徒が多く of 選択肢を持てるように、県としてもしっかりと支えていきたいと思います。こういうあり方は、単なる教育手法の見直しではなく、教育の在り方そのものの根本的な見直しと言えるのではないかと考えています。すなわち AI を始めとする技術革新により、変化が大変速く、先を見通すことが難しい時代におきましては、将来どのような知識や技能が必要になるのかを、学校や行政が先回りして決めることはなかなか難しい状況になります。こうした時代に生徒に求められるのは、与えられたものを学ぶ力ではなく、自らの将来に必要な学びを自ら見極め、主体的に選び取る力であると考えます。この構想はその力を高校の3年間で育てていく取組でもあります。生徒から選ばれる学校づくりと、本県の子どもたちが将来にわたり質の高い学びにアクセスできる、新たな高校教育の基盤づくりを、この構想によって進めていきたいと考える次第です。是非ともこの構想の方向性について、委員の先生方と認識を共有させていただいたうえで、それぞれのお立場からご意見をいただきたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。

■橋本委員

今、知事から大変熱意のあるご説明をいただき「山梨全体を一つの学びのキャンパスへ」という強い思いが伝わってきました。私からは2点申し上げたいと思います。

まず1点目は、「実現する将来像」に掲げられている、「社会の変化に応じて、進化する教育環境」についてです。現実を見ますと、施設や設備の老朽化がかなり進んでいるのではないかと思います。私立高校の授業料無償化が進む中で、より充実した教育環境を求めて私立高校に進学する生徒も多いのではないかと思います。

例えば、トイレ一つを見ても、公共施設や家庭ではかなり綺麗な環境になってきていると思うのですが、学校に入ると、少し時代遅れではないかと感じると思います。もちろん学校選択は環境だけで決まるわけではないのですが、公立高校も環境を整えて「公立を選びたい」と思えるようになってほしいなと思います。

また、環境で言えばバリアフリーとか、エレベーターのないところが、まだまだあると思います。障害のある子どもでも、他の子どもと同じように学べる教育環境整備を、ぜひ早く進めてほしいなと思います。

2点目は、小学校段階からの教育です。長く教員をしていたこともあり、小学校に目が向いてしまうのですが、ネクストハイスクール構想は、単に高校3年間の改革ではなくて、小学校段階から将来を見通した教育の積み重ねと小中高が連動することが不可欠だと考えます。高校で主体的な進路選択や探究活動の質を高めるためには、小学校段階から自己理解や多様性の尊重、キャリアへの意識を育むべきだと思います。その観点から、3点申し上げます。

1点目は、多様性を尊重し、可能性の枠を広げるジェンダーフリー教育です。高校での文理選択や将来の職業選択において、いまなお「男だから」「女だから」という無意識のバイアスが影響している現状があります。このバイアスは学校や家庭の中で無意識に形成されていることが少なくありません。小学校段階からその子らしさを徹底して尊重し、多様性を見つめる土台を築くことこそが高校での主体的な進路選択や探究活動の質を高める原動力になると思います。

2点目は、先を見据えたキャリア教育です。小学校におけるキャリア教育は、単なる職業調べではなく、自分を知り社会とつながることを実感する、先を見据えた生き方教育であるべきだと思います。子どもたちが地域の大人や地元の企業、さらに構想により高校生が活発になってくると思うので、その高校生をリアルなロールモデルとして、そういった方たちと広く触れ合う機会を多くして、日常の学習や行事の中で役割を果たす喜びや協働する喜びを、実感することを通して社会に参画する力の種を小学校段階からしっかりと蒔いていく必要があると思います。

3点目が、キャリアパスポートの利活用です。キャリアパスポートの利活用については、令和7年度の教育委員会の活動状況報告の学識経験者の意見欄に、県立大学の池田教授が書かれています。その内容は、「キャリアパスポートの利活用については、これまで目標未達の状況にある中、今年度は昨年度より実績値が低下しています。児童生徒が自身の学びや成長を振り返り、将来の目標につなげられるよう、その意義や活用方法への理解を深めるとともに、環境整備や指導上の工夫を一層進めることが期待されます」というものでした。これは貴重なご示唆をいただいたと思います。

キャリアパスポートを「書かせるもの」から「振り返るもの」へと転換し、形式的な記入作業で終わらせることなく、担任や保護者が対話を通じて子どもの成長を認めるツールとして活用し、小学校から中学校、高校までを通した中で児童生徒がみずからの変容を実感し、自己肯定感を高めるものにしていくことが重要だと思います。

また、キャリアパスポートを小学校から中学校、さらにネクストハイスクールへと学びの軌跡を効果的に引き継ぎ、高校側が生徒の原点を把握した上で、個に応じた指導や

探究活動の伴走に生かせる体系が構築されることを期待します。

最後になりますが、子どもたちが小学校段階からキャリア教育やジェンダーフリー教育を通して、自分らしく生きる土台を築き、社会とつながる意欲を育み、その歩みをキャリアパスポートで振り返りながら高校へ進んでいく。この小・中・高を通じた一連のプロセスこそがこのネクストハイスクール構想が目指す魅力ある高校教育の土台となり、その先の未来を拓く力となると信じています。

■長崎知事

大変重要なお話だと思います。小学校など早いうちから自分が確立されなければ選べないわけですね。しかも選ぶときにバイアスがかかっていると選択の範囲が狭くなってしまい、可能性を発揮する機会を制限してしまうことにもなりかねません。

そういう意味でも、小学校時代から積み重ねていくということが大事だと私は理解をいたしました。

■橋本委員

それを理解していても、現実にはまだ「男だから」「女だから」という考え方の中に立っている部分があるなと思います。ぜひ、その点は強力に進めていただければと思います。

■長崎知事

大変重要な話です。

また、設備の話も重要です。中身が魅力的でも、トイレが汚ければそれは嫌ですね。大変重要なので、荻野教育長と一緒に頑張りたいと思います。

加えて、小学校段階から自分で選択するための素養や力を育てていくという視点は大変重要だと思います。

■橋本委員

そうした取組が、教師の熱意や学校の状況によって、実施されたり、されなかったりするのではなくて、きちんとその学びを位置づけるということが必要かと思います。

■長崎知事

山梨全体を一つの学びのキャンパスとして捉え進めていくことが重要ということですね。

■橋本委員

そうです。

■長崎知事

それでは、小澤先生、お願いします。

■小澤委員

私は高校生の母親です。家に帰ると息子と日々向き合っていますし、学校や塾の先生方とお話したりすることもあります。その中で感じるのは、自分が受験をした30年前とあまり変わっていないのではないかということです。世の中はもっと進化しているはずなのに、人を評価する枠組みや物差しはあまり変わってないように感じ、少しがっかりした経験があります。

この多様化した時代においては、さまざまな学びがもっときちんと評価されるべきだと思います。しかし、何をやったかということや、どのように到達したかというプロセスよりも、結果や点数、人との比較が重視される社会は、あまり変わってないように感じます。大学が変わっていないのか、あるいは社会が求める人材が変わっていないのかもしれませんが、そう考えると閉塞感を感じざるを得ません。

そのような中で、山梨まなびのネットワーク構想を伺うと、とてもわくわくします。もし自分が高校生だったら、一つの高校に縛られず、さまざまな場所で学べるというだけで、大人からの後押しを感じると思いますし、わくわくすると思います。

一方で、そのような学びを経験した生徒たちが、大学進学や社会に出た際にどのように評価されるのか、その学びの過程がきちんと評価されるのかについては、少し不安もあります。さまざまな高校で単位を取得した場合の評価や評定をどうするのか、その基準についても今後模索していくことになると思います。そうしたことを考えると、教員のマインドリセットも非常に重要ではないかと感じます。

これまでとは違う視点で、新しい人材を育てるという意識のもとで評価していくことが必要であり、高校だけでなく、大学や社会全体でも取り組んでいかなければ、理想論だけで終わってしまうのではないかという懸念があります。

また、3年間で62億円を投資して進めていく事業ですので、3年後に使いこなせないハードだけが残し、予算がなければ運営できないようなものではなく、スタートアップとしての役割を果たし、その後も自走できる仕組みにしていきたいと思います。

さらに、社会もこの構想にコミットしていく必要があると思います。産業界の方々もアクセスできる仕組みを整え、子どもたちのためだけではなく、自分たち自身のこととして関わり、教育に参加することがメリットになるような、ウィンウィンの関係を築いていけるような施策にしていきたいと思います。

例えば、学校が利用していない夜間には、地域の大人や産業界の方々も施設や設備を利用できるような仕組みがあれば、高校生だけでなく地域全体、さらには山梨県民全体が学び成長していくための起爆剤になるのではないかと思います。そうした取組に期待しています。

■長崎知事

ありがとうございました。評価される物差しですね。こうしたシステムの中で学んだ場合に、大学進学は大丈夫なのか、その先の人生は大丈夫なのかという不安が出てくるのは、当然ご心配になることだと思います。

■小澤委員

きちんと学んだ子どもたちが、きちんと評価されるようであってほしいです。

また、今学ぼうと思えばコンテンツはいくらでもあります。やる気のある人はいくらでも学ぶことはできます。一方で、そこから取り残されてしまうと停滞してしまう面もあります。そうした中で、情報の受け手であるだけでなく、発信側になることが重要になってくると思います。また、体験の価値もこれまで以上に高まってくるのではないかと感じています。情報の受け手だけでなく発信側になるというマインドを、高校生のうちから身に付けることができたなら、社会全体が非常に活性化するのではないかと思います。

■荻野教育長

今のお話は非常に大切な視点だと思います。特に、教員が変わらなければいけないというご指摘は、本当にそのとおりだと思います。確かに教育現場も変わってきていると思いますが、世の中の変化に伴い、これから子どもたちに身につけてほしい力も変わっていきます。それに合わせて教員も変わっていかなければなりません。

最近、子どもたちの主体性や、自ら選び取っていく力が大事になってきています。そうした力を育むためには、そのような環境を教員が作っていくことが重要です。これまでは一斉に教えることが多かったですが、これからは一緒に考えたり、学ぶきっかけを与えたりする役割がより求められると思います。そういう意味では教員研修も変えていかなければいけないと思います。

また、努力した子どもたちが適切に評価されることも重要です。大学入試を例に挙げられましたが、現在はペーパーテストだけで評価する仕組みから少しずつ変わってきています。面接などを積極的に取り入れる大学も増えており、世の中も少しずつ変化していると感じています。

完全に変わったわけではありませんが、そのような状況の中で、山梨県が率先して変化を進め、子どもたちが自ら求めた学びに取り組み、その成果が適切に評価されながら社会へ羽ばたいていけるような仕組みを、地方から少しずつ創っていければと考えています。

■長崎知事

アメリカの大学入試では、ボランティアで何をやったのか、どのようなことを学んだのかなど、かなりさまざまな視点から評価されますよね。日本もだんだんそういう方向になっていくのではないかという気がします。

さらにその手前の話として、そもそも大学に行かないとまずいのかということもあると思います。例えば、プロ野球選手ではないですけど、高校で手に職をつけて実業界に入った方が、生涯年収ははるかに高くなるという計算をする子どもたちも出てきています。アメリカでは、いわゆる「スーパーブルーカラー」と呼ばれるような、例えば、年収5,000万の配管工がフェラーリに乗って水道を直しにくるという物語もあります。そ

ういう意味では、高校生に伴走する先生方の意識も常にアップデートしていく仕組みが必要ですよね。

先生方にもさまざまな新しいものを学んでいただき、情報を吸収していただいて、これから先の子どもたちの将来に対する想像力を豊かにしていただくことが大切だと思います。そうした意味で、先生方の研修などそういう仕組みがこれからは問われてくるように感じています。

■小澤委員

先生たちに求められる能力として、ファシリテートする力は、これまでと比べてより大きくなっていると思いますか。

■荻野教育長

まさにそのとおりだと思います。正解を教えることも、一部分としては大事ですが、それ以上に、生徒が自分で考えたり、間違ってもいいから試行錯誤したりすることが大切だと思います。

これからの世の中は、本当に正解のないことが多くなると思いますし、大人も経験したことのないような社会になっていくと思います。そういう意味では、未来を託す子どもたちをリスペクトしながら、教員も子どもたちと一緒に成長していくように関わっていくことが大切だと思います。

また、それは教員だけでなく親も同じだと思います。私自身も親ですが、子どもに成長させてもらった部分があります。お互いをリスペクトしながら関わっていくことが大切ではないでしょうか。

そういう意味では、ファシリテートする力は、これからの教員にとって本当に大きなテーマの一つだと思います。

■長崎知事

加藤先生、お願いいたします。

■加藤委員

山梨県全体を一つの学びのキャンパスにするという構想について、大変わくわくしながら伺いました。私自身も、もう一度高校時代に戻りたいと思うほど魅力的な内容だと思います。

私が1977年にアメリカへ高校留学した際の経験を思い出しました。当時通っていた高校には100科目ほどの授業があり、アメリカのコンテンポラリーヒストリーをはじめ、もっと古い歴史や世界史、東洋史、コンピューターサイエンスなど、多様な科目の中から自由に選択することができました。1970年代でありながら、コンピューター言語「BASIC」を学ぶ機会もありました。今回示されたビュッフェ方式の学びは、生徒が自らの興味・関心に基づいて選択し、自分のやりたいことを追求できるという点で非常に素晴らしい取組だと思います。

当時、コンテンポラリーヒストリーの授業で、私が日本人ということから「アメリカが広島・長崎に原爆を投下したことで戦争は早く終結した。その是非について議論しよう」というディベートが行われました。私自身、そのような視点で考えたことがなく、また当時はスマートフォンなどありませんでしたので、自分の知識だけで議論に参加しました。多くの生徒が「戦争が早く終わったのだから良かった」という立場でしたが、私は被爆者が今なお癌などで苦しんでいることを伝えました。その話を聞いた生徒たちは大変驚いていました。それを知ったジャーナリズムの先生から、原爆投下後の広島を取材し「Hiroshima」というルポルタージュを書いたジョン・ハーシーを紹介され、本人との文通も経験しました。これがきっかけとなり、私は後にジャーナリストの道を志すことになります。

高校時代は、自分の夢や将来を具体化するための扉を開く最も大切な時期であり、そのような機会を山梨県が公立高校で提供しようとしていることは、本当に素晴らしいことだと思います。

また、留学支援に携わる立場から申し上げますと、山梨県全体をキャンパスとするのであれば、その先に「世界とのつながり」をぜひ構想に取り入れていただきたいと思います。コロナ禍を経て Zoom などのオンラインツールが普及し、海外との交流は以前に比べて格段に容易になりました。1年間の留学には100万～200万円、私立高校への進学にはさらに大きな費用がかかりますが、オンラインであれば世界中の高校生とつながることができます。

特に今回のネクストハイスクール構想の中で私が注目しているのは、農業高校や工業高校などの専門高校です。生徒たちは、例えば、ロボット分野やワイン醸造など、明確な目標を持っており、世界にも同じような志を持つ高校生がいます。農林高校であれば、ワイン産地であるフランスのボルドー、イタリアのシチリア、アメリカのナパバレーなどの高校生と交流することも考えられます。

また、農林高校ではワイン醸造の分野を学ぶのが主かもしれませんが、地域づくりや観光振興、マーケティング、ラベルデザインなど幅広い分野と関わっています。専門高校の学びを軸に、例えば、商業高校でマーケティングを学ぶなどといったことが可能になると思います。さらには世界中の生徒とつながることによって、可能性は無限に広がると感じます。

高校生には、私たちの世代には思いつかないような柔軟で斬新な発想があります。週1回でも月1回でもよいので、拠点校を活用しながら世界の高校生と交流し、議論する機会を設けていただきたいと思います。専門分野だけでなく、地球温暖化やSDGsなど世界共通の課題についても学び合うことが重要です。その意味でも、世界との連携が大事になると思います。

一方で、橋本先生のお話にもありましたが、こうした学びを支えるためには小学校・中学校段階からの教育が重要です。個々の個性を伸ばす教育と同時に、基礎学力の定着は欠かせません。数学をはじめとする基礎的な学力がなければ、将来的に高度な研究や専門的な学びにはつながらないと思います。日本から多くのノーベル賞受賞者が生まれているのも、しっかりとした基礎学力があつてこそだと思います。

現在、全国の高校生を集めたサマースクールを実施していますが、この数年間を見ると、基本的な学力が低下していると感じています。その背景にはAIの普及もあるのではないかと思います。私たちの世代は図書館で調べたり、自ら努力したりしなければ知識を得られませんでした。しかし現在はAIを使えば瞬時に答えが得られます。そのため、「分かったつもり」になる一方で、知識が十分に定着せず、自分で考える力が弱くなっているように感じます。

私たちのサマースクールでは2週間携帯電話を預かっていますが、AIに頼れない状況になると、自分の知識や考えを基に議論しなければなりません。基礎学力が不足している場合、「それは違うのではないか」と指摘されても十分に応答できず、双方向の議論が成り立たないケースも見受けられます。この点はここ2、3年、特に強く感じているところです。

現在、AIとの向き合い方は世界的な課題となっています。AIを否定するのではなく正しく活用する力を育てることが重要です。山梨県においても、実践の場で先生方と生徒が一緒になり、AIとの適切な関わり方や活用方法について先進的に取り組んでいただければと思います。

■長崎知事

基礎学力が十分に身につけていないままにAIに依存してしまうと、AIの示した答えが正しいかどうかを判断することすらできませんからね。

また、学びのテーマに応じて外部と連携するのは、海外の同じ分野に関心を持つ高校生だけではなく、県内の他の教育機関との連携も考えられると思います。例えば、ワインであれば大学のワイン醸造学科があるし、今後はフィジカルAIのトレーニングセンターもできないかなと思っています。そうした場所で高校生が学び、その学びを単位として認定できるような仕組みはできないですかね。

■荻野教育長

やり方次第だと思います。

■長崎知事

また、海外との交流についてはぜひさまざまな体験をさせたいと考えています。先日も高校生と一緒にインドを訪れましたが、異なる文化や価値観に触れることで、非常に面白い化学反応が起きると感じました。

オンラインの活用も含め、海外の生徒と継続的に交流し、単なる交流にとどまらず中身のある議論へと発展させることができれば、それ自体が学びへの大きなモチベーションにつながるのではないかと思います。

■加藤委員

例えば、アジアには日本語が非常に堪能で、意欲や能力の高い高校生が数多くいます。各公立高校で一人でもよいので留学生を受け入れていただきたいと思います。そうした

生徒が学校にいてことで大きな化学変化が生まれます。「この子はすごい」「パキスタンから来た生徒はこんなに頑張っている」といった刺激を受けることで、生徒たちの意識や学校全体が変わっていくのです。

私がアジア各国を訪問して感じるのは、日本をリスペクトし、日本で農業や工業、ロボット技術、農業技術などを学びたいと考えている高校生が非常に多いということです。そのような留学生が来ることで、日本の生徒たちも「自分たちは日本語しか話せない。もっと英語を勉強しなければならない」と感じるようになります。

実際に、他県のある農業高校では、学校の偏差値が向上したという話も聞いています。

また、英語は世界の共通言語です。単に「This is a pen」といった英語ではなく、自分の考えを相手に伝え、相手の話を理解しながらキャッチボールができる、生きた英語教育が必要だと感じています。

■荻野教育長

ジャーナリストを目指されたきっかけの一つが、高校時代の大人との出会いだったというお話もありました。そういう意味では、ロールモデルとして学校へどんどん地域の方に入ってきていただき、高校が子どもと大人を結ぶ場になれば良いなと思っています。

そういう大人と出会うことで、「これを学びたい」「英語を学びたい」といった欲求が生まれます。必要だから学ぶという形になると、とても良いと思います。まず子どもたちに、自分から学びたいと思うきっかけを与えることが大事です。

先ほど小澤委員もおっしゃっていましたが、出会いや経験がまず先にあって、それが学びのモチベーションになり、学んでいくという流れができると、特に高校生はすごく伸びていくと思います。

■長崎知事

留学生を入れるというのはどうですか。

■荻野教育長

面白い考え方だと思います。これまで交流というと、高校生ぐらいの年代では、割と英語圏の子どもたちが相手だと思われていましたが、加藤委員からアジアというお話がありました。お互いに外国語である英語を使ってコミュニケーションを取るという経験はすごく新鮮だと思います。

■梶浦委員

3人の委員の意見を拝聴しましたが、昨今の教育全体を眺めると、「ものを教える」ことだけに重点が置かれる時代になっていると感じます。知事が示した山梨まなびのネットワーク構想は大変すばらしく、今後の教育の一つの姿だと思います。しかし、小・中学校において「一人の人間を教育する」「一人の人間を育てる」という視点が、教育界全体で忘れられつつあるキーワードではないかと強く感じています。

時代の変化がこれほど速い中では、ある意味やむを得ない面もあります。しかし、本

来の教育とは、小学校1年生であれば7歳の子どもの人間形成を行い、中学生であればその年代に応じた人間形成を行うことであり、その積み重ねの中で自らの将来を考える力を育むことだと思います。教育の根底にあるこうした考え方を忘れてはならないと思います。

ネットワーク構想は時代を先取りした一つの流れであり、県全体で幅広い学びの機会を提供するという点で大変意義があると思います。一方で、教育においては「人間をつくる」ということが基本であり、学びはその土台の上にあるということを、山梨の教育として忘れてはならない大きな課題だと感じます。

また、これだけ変革の激しい時代の中で、教師がその変化に対応していけるのかという問題もあります。そのための研修の場や時間、費用については十分に考えていかなければならない重要な課題です。長時間勤務や時間外勤務の縮減が求められる中で、先生方が教育の変化にどのように対応し、検討し、学んでいくのかを考える必要があり、人員配置の充実も不可欠な課題だと思います。

将来的には、子どもが知識を学ぶことについては、AIを活用して学習する時代がすぐそこまで来ているようにも感じます。しかし、一人の人間として何が良くて何が悪いのか、いじめはいけないこと、お父さんやお母さんへの感謝の気持ちなど、人として大切なことを教える役割はAIには代替できないものだと思います。そうした教育は家庭でも学校でも以前に比べて薄れてきているように感じますが、これらの構想を進める上でも、その根底にある原点はそこにあるのではないかと強く感じています。

■長崎知事

人格涵養ということですね。確かに知識自体はAIを使うことで、驚くほどきれいに道筋ができます。しかし、AIは人を育てることはできない。

そういう意味では先ほどお話のあった国際的な交流や異なる価値観とのぶつかり合いは大変面白いと思っています。子ども同士がそうした経験をしたり、スポーツなどを通じたりして人間的な成長につながるのではないかと思います。

■梶浦委員

先ほど加藤委員がおっしゃった英語については、やはり各国の共通語になっており、現にそのような役割を果たしていると思います。英語に限らず語学力は、子どもたちが世界へ羽ばたいていく上でのベースになるものです。

山梨の教育の一つとして位置づけられるのであれば、英語をはじめとする外国語教育を強化していくことも選択肢の一つではないかと感じます。

■長崎知事

学びの範囲が思い切り広がりますからね。

■梶浦委員

そして目指すのは世界です。山梨でもなく日本でもなく世界に羽ばたく大谷選手のよ

うな人材を育てていこうということだと思います。

■長崎知事

これまでのところでいかがでしょうか。さらに追加のご意見などあるでしょうか。

■小澤委員

先日、日本青年会議所が主催する「政策甲子園」を拝見しました。高校生が政策提言を行い、地域ブロックごとに審査を受けた後、全国大会へ進み、最終的には国民投票などを経て優秀な提言が選ばれます。一番になると首相の前でプレゼンテーションができるというイベントでした。友人の子どもが参加していたこともあり興味を持って見ていましたが、全国の高校生が提案した内容は非常に多岐にわたり、大変面白いものでした。AIを活用していた部分もあったかもしれませんが、プレゼンテーションについてもそれぞれが工夫を凝らしており、とても素晴らしいものでした。

山梨まなびのネットワーク構想においても、横断的な学びを通じて得た成果を知事の前で発表できるような学習成果発表会のような場を設けるとともに、生徒たちの取組を県全体で応援し、その成果がアピールポイントになるような仕組みがあってもよいのではないのでしょうか。

高校の中だけで活動している生徒もいるかもしれませんが、「誰一人取りこぼさない」「みんなを巻き込む」という視点で考えると、そのような発表の機会を設けることで、生徒たちの参加意欲を高めることができると思います。

また、「ネットワーク構想を活用するともっと楽しくなる」「やりたい生徒だけがやれば良いのではなく、自分もやってみよう」と思えるような仕掛けを大人が用意することも大切ではないのでしょうか。

確か知事も以前、高校生の発表を聞いて大変面白かったとおっしゃっていたと思いますが、いかがだったでしょうか。

■長崎知事

デジタル技術を活用したプロジェクトベースドラニングがありました。中学生は自分のクラスの課題、高校生は自分の学校の課題、大学生は地域の課題について、それぞれ解決策を考え、デジタル技術を使って課題解決に取り組むものです。その発表会が非常に素晴らしかったです。

■小澤委員

私は聞くことができなかったのですが、素晴らしかったのですね。

■長崎知事

びっくりするぐらい良かったです。

■小澤委員

大人も刺激を受ける場があるのは良いですね。私もぜひ参加したいと思います。

■長崎知事

確かにそうですね。

■相浦委員

子どもの発想はヒントになるからね。

■長崎知事

いや、もう子どもとは思えないほどでした。着眼点が非常に優れていて、聞いていて大変面白かったです。

■小澤委員

レベルもすごく高かったのですか。

■長崎知事

高かったですね。いくつか発表がありましたが、その中で印象に残っているのが、ある神社をテーマにしたものでした。外国人観光客が多く訪れる一方で、参拝の仕方が分からないという課題に着目し、位置情報と連動して神社の情報を提供する仕組みを提案していました。

その神社に来ると、「まず手を洗ってください」「次はこうしてください」といった参拝方法が順番に表示されるほか、その神社の由来や歴史などの情報も見ることができるというものでした。しかも、それを神社ごとに作成するという発想でした。

私も「それは面白いね」と話していたのですが、その場にいた起業家の方から「ぜひ紹介してほしい。事業化してみたい」という話が出るほどで、本当に面白い提案でした。

■小澤委員

そのように社会とつながると、子どもたちが一番わくわくしますよね。

■長崎知事

そう思います。今は世界を見ても、高校生や大学生くらいの年代でも、自ら事業を立ち上げて、中には、私たちの生涯年収に匹敵するような収入を得ているケースもあり得る時代になっています。

■加藤委員

私どものサマースクールに参加している生徒たちを見ていると、それぞれの地域に帰った後も、全国で知り合った仲間と一緒に起業するケースが非常にたくさんあります。ただし、お金を稼ぐことが目的ではなく、いかに社会課題を解決し、社会に貢献できるかをテーマにしている子どもたちが本当に増えていると感じます。

若い世代は非常にピュアで、まさに吸い取り紙のような存在です。だからこそ、私たち大人が誤っていれば、その影響を受けてしまうわけで、そういう意味でも、こうしたピュアな子どもたちをいかに育てていくかが、これからますます大事になってくると思います。

このネクストハイスクール構想がすごいと思うのは、山梨県では現在4校とのことで、全国の都道府県でも2、3、4校とあり、全国では200校規模になります。

世界とのつながりを持ちつつ、同時に、こうしたネクストハイスクール同士がつながることも重要だと思います。例えば文部科学省に、各ネクストハイスクールがどのような取組を行っているのかが分かる情報発信ページを作っていただき、学校同士で連携したり、一緒に何か新しい取組を進めたりできるようになると大変面白いのではないでしょうか。

そして、そのような全国的なネットワークや情報発信の拠点が山梨県になれば素晴らしいと思います。

■荻野教育長

本日は非常に濃密な会議だったと思います。さまざまなヒントをいただきました。次期学習指導要領でも多様性の包摂が重要なテーマとなっていますし、子どもたちが多様な学びを求める時代に入ってきています。その中で、大人側がどのような学びを用意していくのが大切だと思います。

また、基礎学力は確かに大事ですが、併せて、子どもたちが好きなことを好きなだけ学べることや、良いところを伸ばしていく教育ができれば良いと思っています。

例えば公立高校には特徴のある職業系高校があり、職業系学科の先生方がいます。いわば、それぞれの仕事のエキスパートがいるわけです。このネットワークをうまく使って、そうした先生方と普通高校の生徒がつながるだけでも大きな刺激になりますし、新たなインスピレーションを得ることもできると思います。

そういう意味で、この構想はいろいろな可能性を秘めており、次期学習指導要領を先取りする取組にもなっていくのではないかと考えています。本日いただいたご意見を参考にしながら、できるだけわくわくする魅力のある教育の計画を立てていきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

■長崎知事

先生方にも多彩な経験を積んでいただく機会を用意しないといけないですね。

■荻野教育長

そうですね。子どもたちだけではなく、教員もさまざまな経験を積み、一緒に学び、一緒に育っていくことが大事だと思います。

■加藤委員

他の社会を知っている方や、社会経験のある方が学校の先生になることも良いと思い

ます。

■長崎知事

それは楽しいと思います。

■加藤委員

もちろん、大学を卒業してそのまま学校の先生になる方も必要だし、一方で、社会で長く経験を積んだ後に学校の先生になる方がいても良いと思います。

■長崎知事

毎年一人ずつ南極越冬隊に送りましょう。

■相浦委員

この4校で新しい取組を立ち上げるということは、現場には相当なエネルギーが必要になると思います。その点へのご配慮をいただければ、現場も助かると思いますので、よろしくお願いいたします。

■長崎知事

もちろんでございます。今のご指摘は大変重要だと思います。

このテーマは、山梨全体でどのように良くしていくか、まさにこの会議の重要な柱の一つになろうかと思っています。今後も引き続き、折に触れてさまざまなご意見やご指導をいただければと思います。ありがとうございました。